

植物園運営の現状

理学研究科

一昨年の植物学教室による樹木伐採や除草剤散布などをきっかけに、その管理運営のあり方について内外に議論を呼んできた理学部附属植物園で三月中旬、再び除草剤が散布された。除草剤散布は植物園にとってどんな意味を持つのか。あるべき植物園の姿とはどのようなものか。植物園管理運営委員会委員長の岡田清孝氏(植物学教室)、委員の曾田貞滋氏(動物学教室)、加藤重樹氏(化学教室)および関係者・利用者に取材した。

再度の除草剤散布

本紙の調べでは、除草剤の散布が行われたのは三月中旬。圃場まわりと温室の窓下(脇の通路)、池そばの斜面の一部、植物園西に位置する数理解析研究所の東にあるツバキ等数本の樹木の根元に、草本類が黄色く枯れた薬剤散布の跡が見られる。

今回の除草剤散布を実際に行ったのは、植物園園丁の栗津健司氏である。栗津氏と岡田清孝委員長によれば、圃場と温室回りの除草剤散布は、圃場の研究目的利用のために毎年同規模に行われているもので、園丁が管理運営委員会や委員長である岡田

氏から前もって許可を得る必要のない圃場管理作業という。岡田氏は「散布は圃場まわりと温室の領域内に限っており、他の部分には影響は出ていない、散布した除草剤も必要最小限量である」といい、散布目的は圃場まわりについては植物学教室の実験材料として大量に用いるカボチャの苗を定植し、生育を均等にすること、温室の窓下については温室への日照を確保すること、と回答した。

圃場まわりについては植物学教室の実験材料として大量に用いるカボチャの苗を定植し、生育を均等にすること、温室の窓下については温室への日照を確保すること、と回答した。

圃場まわりについては植物学教室の実験材料として大量に用いるカボチャの苗を定植し、生育を均等にすること、温室の窓下については温室への日照を確保すること、と回答した。

圃場まわりについては植物学教室の実験材料として大量に用いるカボチャの苗を定植し、生育を均等にすること、温室の窓下については温室への日照を確保すること、と回答した。

科の合意事項となっているために、ここでの措置については、植物学教室以外の運営委員は干渉する必要のない問題と認識されている模様だ。加藤氏も、除草剤散布は植物学教室の恒例の作業と捉えている。

る。二人の園丁の植物園管理作業に対する認識には、大きな隔たりがある。

京都大学の福井勝義氏(文化人類学)、山極寿一氏(人類進化学)、松沢哲郎氏(霊長類学)など、動物学研究者が編集委員として参加している雑誌「エコソフィア」第十三号(二〇〇四年五月三十日発行)に、湯本貴和氏(総合地球環境学研究所教授)による京大植物園についての寄稿が掲載されている。これによると、植物園は安定した自然モデル実験場として、動植物学でのフィールドワーク研究に重要な役割を果たしてきた。「研究者は調査申請さえ提出すれば、

薬剤散布、林床の攪乱、伐採や枝打ちによる光条件の急激な変化といった、対象が破壊されたり、実験条件が変わったりする心配のいらない調査地を確保できた(湯本氏)。

以上から、「除草剤散布を毎年同規模に行っている」という認識は、運営委員会と栗津氏の間でしか共有されていないと見られる。

岡田氏は今回の散布の場所を、圃場まわりと温室の

圃場、温室、及び分館については引き続き植物学教室が管理することが理学研究

圃場、温室、及び分館については引き続き植物学教室が管理することが理学研究

圃場、温室、及び分館については引き続き植物学教室が管理することが理学研究

